

論理空間とは何なのか

～野矢茂樹著『ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』第8章「論理はア・プリオリである」の分析

2023年8月25日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

(※8月29日に付録を追加)

本稿は野矢茂樹著『ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』(筑摩書房、2006年)第8章「論理はア・プリオリである」(165～189ページ)の分析である。

論理がア・プリオリではないことは、これまでのレポートで何度も詳細に説明してきた。本稿では主に論理空間の問題について詳細に、野矢氏が見落とされた論点も含め検討していきたいと思う。

論理空間とは、結局のところ命題の真偽を決する前提となる世界(とりあえずそう呼んでおく)、事実・事態の集合体であると言える。それは現実世界でも良いし、物語でも良い。「太郎と花子は家にいる」という命題は「現在の事実」という前提ならば偽で「昨日における事実」という前提ならば真であるかもしれない。時間を考慮しなければ真か偽どちらかである(=真偽が決定できない)ということになる。「サンタがトナカイと空から飛んできて世界中の子どもたちにプレゼントを配る」はそのことについて書かれた物語があればその物語(の論理空間)において真であるが、現実世界では偽である(それをナンセンスと呼ぶべきかに関してはさらなる議論が必要かもしれない:本稿第7章)。

論理空間はルールの設定によっても導かれる。野球のルールにより野球というゲームにおける論理空間が形成され、独自の真偽関係が導かれる。「バットを三回振って投手が投げたボールに一度も当たらなかったら三振アウト」という命題は野球のゲーム上は真であるが、野球というものがこの世界になかったとしたら(あるいは知らなかったらその人にとって)ナンセンス文以外の何物でもない。そしてラグビーのルールから導かれた論理空間においてもナンセンスである。

人々は命題の真偽を問うとき、特定の状況・条件を想定している。意識していないことも多いが、改めて問われれば答えを導くことができると思う。「論理空間=有意義な言語表現の範囲(つまり言語表現に対応する事実・事態を見出すことができる)」と解釈したとしても、論理空間がただ一つのみ存在するという根拠づけはできないようである(実際、野矢氏も特定の論理空間の設定を試みられている)。

論理空間とはア・プリオリなものではなく、人為的に設定されたルール(当然ア・プリオリではない)や物語によっても生み出さるし、現実世界を構築する様々な具体的経験(過

去の経験・現在の経験)によっても生み出されてくるのである。それは命題の真偽を左右するのみでなく、場合によって異なる論理というものが抽出されたりもするのである。

本稿における引用は、特に指定のない場合は、野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』からのものである。いくつか拙著からの引用もしている。

これまでに私が書いた『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』の分析レポートには以下のものがある。論理はア・プリオリではないことを主張するものである。

「語りえない」ものとは？ ～ 野矢茂樹著、ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む、第1～3章の分析

http://miya.aki.gs/miya/miya_report35.pdf

言語使用のあり方は言語外の対象によって決められる

～ラッセルのパラドクスに関するウィトゲンシュタインの解明について

(野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』第4章の分析)

http://miya.aki.gs/miya/miya_report36.pdf

その他、下記に示す論理学に対する批判的分析において野矢氏の著作に関して論じた箇所があるので参考にしていただければと思う。同じ論理形式でも前提条件、あるいは真偽がもたらされるシチュエーションを変えることによって真理(値)表の内容が全く変わってしまうことについても説明している。

命題を(論理的)トートロジーと決めつけた上で $A \rightarrow B$ の真理値を逆算するのは正当か？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report39.pdf

$A \rightarrow B$ が「正しい」とはどういうことなのか ～真理(値)表とは何なのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report40.pdf

選言の真偽とはいったい何なのか： $(\neg A \vee B) \equiv (A \rightarrow B)$ に根拠はあるのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report38.pdf

<目次> ※ 0内はページ

1. 「操作」にも対象がある (3)
 2. 「pかつq」も $f(x)=x+1$ も特定の事実・事態 (定義域) の前提を必要とする関数と言える (6)
 3. 経験と現実 (9)
 4. 論理空間は一つではない (12)
 5. 規則・ルールを決めることで論理空間が形成される (1) (13)
 6. 規則・ルールを決めることで論理空間が形成される (2) (14)
 7. ナンセンスな話は論理空間となりえるのか (15)
 8. 現実世界においても異なる論理空間を抽出できる (17)
 9. 論理空間は経験として現れうるもの (19)
 10. 存在は経験から導かれる、すべての始まりは経験 (22)
- <付録> 論理の「正しさ」は論理空間に支えられている：第9章「命題の構成可能性と無限」に対する若干のコメント (24)
- 引用文献 (拙著以外) (26)

1. 「操作」にも対象がある

論理語が何なのかを示そうとすれば結局具体的事例を引き合いに出すしかないことは既に (私が) 述べてきた。また拙著、

$A \rightarrow B$ が「正しい」とはどういうことなのか ～真理(値)表とは何なのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report40.pdf

において、

$A \rightarrow B$ が「正しい」とはいったいどういうことなのだろうか？ $A \vee B$ が「正しい」とは、 A または B のどちらか (あるいは両方) が真である、だけどどちらが正しいのかまでは分からない、という「意味」を持っている。 $A \wedge B$ が「正しい」とは A も B も真だという「意味」である。(宮国、1 ページ)

と説明している。論理語といえどもそれに対応する何らかの対象、つまり事態や事実というものがある。論理は具体的事実として現れる対象の在り方から抽出されるものであって、ア・プリオリなものでは決してない（本稿最終章でも対象の在り方なしに論理は成立しないことを説明している）。

野矢氏は

論理語は名ではない。（野矢、167 ページ）

とし、論理語について下のように説明されている。

対象を表す名ではなく、要素命題に対する、あるいは要素命題の真理領域に対する「操作」として捉える。（野矢、167 ページ）

しかし、操作というプロセスそれ自体が、具体的な事実・事態として現れているのである。例えば「走る」という言葉は、一つの対象物（車や人や動物など）が走るという事実・事態を指し示すものである。「操作する」も同じである。言葉というものはそれが指し示す何らかの具体的事象、事物があつてこそ意味を持つ（ナンセンスではないということ）。

世界が現実になつてゐるかを知る前に、その探求が可能であるためにも、われわれは論理を把握していなければならない。そしてこの論理のア・プリオリ性は、まさに論理語が操作であることによるのである。（野矢、179 ページ）

こういった見解が転倒したものであることは、これまでに（私が）繰り返し説明してきた。論理は現実のあり方、事実関係から導かれ、根拠づけられ、その「正しさ」を確かめられるものなのである。「世界が現実になつてゐるかを知」っているからこそ、そこから論理を導き出すことができるし、論理の正しさを確かめることができるのである。

どのような要素命題が与えられようとも、その真理領域を反転するという否定の操作、共通部分を取り出すという「かつ」の操作、合併する「または」の操作、そうした操作の働きは一定のものとして定まっている。すなわち、操作はア・プリオリなのである。この操作のア・プリオリ性が、論理のア・プリオリ性にほかならない。（野矢、180 ページ）

この野矢氏の説明にもかかわらず、「または」「かつ」「ならば」といった論理語が導き出す正誤関係は、論理学が示すような一律なものではなく、それが取り扱う（野矢氏の言われる）”

定義域”（野矢、174 ページ他）によって変化しうるものなのである。そのあたりのことについては、以下の拙著で具体的に説明している。

命題を（論理的）トートロジーと決めつけた上で $A \rightarrow B$ の真理値を逆算するのは正当か？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report39.pdf

選言の真偽とはいったい何なのか： $(\neg A \vee B) \equiv (A \rightarrow B)$ に根拠はあるのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report38.pdf

たとえば「1を足す」という操作は、出発点として「0」が与えられたならば、その操作を反復することによって自然数列を生み出すことができる。数の「全体」を見通すことはできなくても、このようにして数の「体系」を見通すことはできる。こうして『論考』は、論理を操作によって張られる体系として見通しえたのである。（野矢、181 ページ）

・・・この説明に関して“具体的に”考えてみてほしい。「1を足す」という“操作”とはいったい何なのだろうか？ 例えばそこには何も置いてない。つまり0である。そこに小石を1個持ってくる。その状態を「1」と（いう名で）呼んでいる。そこにもう一つ小石を加える。その状態を「2」と（いう名で）呼んでいるのである。1、2、3、4・・・という数字それぞれに対応する意味としての対象（物）がありうる。そして「加える」という操作にもそれぞれに対応する事象・状況が実際にあるのだと言える。

拙著、

**“ア・プリアリな悟性概念”の必然性をもたらすのは経験である
～『純粹理性批判』序文分析**

http://miya.aki.gs/miya/miya_report20.pdf

からの引用である。

一方、「1恒河沙」に1を足すと「1恒河沙1」に本当になるのか？ 私たちはそれを示すために具体的事物を用意したりイメージしたりすることはできない。つまりそれは「仮説」なのだ（もちろん具体的事物で示すことができれば実証されたことになる）。「ある数に1を足すと1増える」というのは具体的事物により指し示すことのできる経験則（つまり経験からの帰納）の“演繹”なのである。ひょっとして数が果てしなく大きくなると数はそれ以上増えないという世界が広がっている可能性さえあるのだ。私

たちはそれを知らないのだから。つまり「 1 恒河沙 $+ 1 = 1$ 恒河沙」である可能性さえある、ということなのである。いずれにせよ、具体的事物、経験として認められるまでは、それはあくまでも「仮説」であるにすぎないのだ。(宮国、5 ページ)

野矢氏は、”「二つに折る」という操作”(野矢、176 ページ)についても”「 1 を足す」という操作”(野矢、176 ページ)と同様だとしているが、新聞紙やはがきを「二つに折る」という操作も、具体的事実・事態として現れる事柄であるし、紙のサイズや厚さを考えるといつかは二つに折ることができなくなる時がやって来る。これらの事象を”具体的に”考えれば無限を構成しうるものではないことは明らかである。

2. 「 p かつ q 」も $f(x)=x+1$ も特定の事実・事態 (定義域) の前提を必要とする関数と言える

野矢氏は $f(x)=x+1$ という関数について、

一見してこの関数を用いて「以下同様」という地点に立てるように思われる。つまり、こうである。最初の入力を 0 とする。そのとき出力は 1 である。次にそれを入力する。そうすると新たな出力 2 が得られる。次にそれを入力する。そうすると新たな出力 3 が得られる。以下同様。かくして、 0 から出発して関数 $x+1$ を用いて自然数を得られる。しかし、ウイトゲンシュタインの観点からすればこれはまったくの誤解である。関数は定義域とコミになってのみ意味を確定する。それゆえもし定義域が最初 $\{0\}$ であるならば、それを関数 $x+1$ に入力して得られた 1 はもうその関数に入力できない。出力 1 が再び関数 $x+1$ に入力されるためには最初から定義域に 1 が含まれていなければならない。 1 を入力して得られた出力 2 に関しても同様である。その 2 をさらに関数 $x+1$ に入力させるためには、最初から定義域に 2 が入っていないなければならない。それゆえ、関数 $x+1$ で自然数を出したいのであれば、最初から定義域が自然数でなければならない。関数 $x+1$ には自然数を構成する力はないのである。(野矢、175~176 ページ)

・・・というふうに説明されている。要するに、 $f(x)=x+1$ の入力・出力が「正しく」行われる条件として自然数が既に”前提”されているということなのだ。「自然数を構成する力はない」のは当然である。自然数を前提とした上で関数の「正しい」出力がもたらされているからである。「定義域が自然数」という前提があって正しい $f(x)=x+1$ の入出力が担保されているのだ。

「関数は定義域とコミになってのみ意味を確定する」という表現もこのことを念頭におけば少し“意味”が分かるのではなかろうか。関数は自然数、そして1に1を足すと2になる、2に1を足すと3になる・・・という数字どうしの関係、さらには数字という“言葉”が指し示す具体的事物との関係（これに関してはウイトゲンシュタインと異なる見解だが）、それによりもたらされる自然数の体系が前提となり、その関数の「意味」が確定されているということなのである。これら事実・事態の集積なしに、それらの知識なしに $f(x)=x+1$ と突然言われても何のことだか訳が分からないであろう（その人にとってはナンセンス、意味の分からない文字列）。

次に命題関数についてである。

ウイトゲンシュタインは複合命題を「真理関数」と呼ぶ。そしてこの呼び方は現代論理学でも一般的な呼称にほかならない。しかし、われわれはこの呼び名にだまされてはいけない。ウイトゲンシュタインはけっして論理語を関数を表すものとみなしてはいないからである。真理関数として見るならば、たとえば「 p かつ q 」において p と q は変項であり、そこには命題の真偽が入力される。出力はその結果として得られる命題の真偽である。このように、論理語「かつ」は、構成要素の真偽からその結果として得られる命題の真偽への関数とみなされるそれは真偽から真偽への関数であるから「真理関数」と呼ばれる。これが現代論理学の観点からの説明であるが、他方、ウイトゲンシュタインが「 p かつ q 」を「真理関数」と呼ぶとき、それはいささかも関数ではない。第一に、ここにおいて「 p 」も「 q 」も命題であり、変項ではない。それゆえ「 p かつ q 」は命題であり、関数ではない。第二に、論理語「かつ」は「 p 」の真理領域と「 q 」の真理領域の共通部分を取り出すという操作にほかならない。そして操作は関数ではない。それゆえウイトゲンシュタインは自ら「真理関数」という呼称を用いながらも、次のように注意を与える。

5・44 真理関数は実質的な関数ではない。(野矢、177 ページ)

・・・果たして”「 p かつ q 」は命題であり、関数ではない”と断定できるだろうか？

私は「 p かつ q 」は様々な形で「関数」になると考える。そしていずれの場合においても”定義域”、その命題が「正しい」（あるいは「間違い」）であることを支持する前提条件、前提となる事実・事態というものがある。

上記 $f(x)=x+1$ と同様に「 p かつ q 」が常に「正しい」命題であると前提すれば、つまり「定義域」というか「 p かつ q 」という命題がナンセンスではなく意味を持つ、具体的事実・事態を指し示すもので、常に「正しい」ものであると前提するならば、 p と q には様々な命題が代入可能となる。つまり「変項」なのである。 $f(x)=x+1$ において自然数という体系を前提とした上で x に1や2や3などを代入できるのと同じである。

「動物∧角がある」生物（これも「生物」という”定義域”が必要）という場合、現時点における生物分類、「動物」や「角」という言葉がどういうものを指し示すのかという具体的事実との関連性を前提とした上で、「真理領域の共通部分」を取り出す操作であるということもできよう。

これは「真偽から真偽への関数」という「現代論理学の観点」とは全く異なるのではあるが、生物に関する事実認識という前提（定義域）に応じた事実の取り出し、つまり“出力”としてサイやシカなどの動物（真理領域の共通部分としての出力）をもたらす「関数」と捉えることができるのである（“数”ではないのだが、特定の実事・事態を取り出すことに関しては $f(x)=x+1$ と同様である）。

生物という“定義域”を設定した上で「海に住む∧哺乳類」と“入力”すれば、出力として「クジラ」とか「イルカ」などの答えが取り出せる。このように「 p かつ q 」はこの場合においても p と q を「変項」とする「関数」と捉えることが可能なのだ。 $f(x)=x+1$ という関数が（自然数という）定義域を前提とした上で成立しているのと同じなのである。

では「真偽から真偽への関数」という「現代論理学の観点」はどのような場面を指すのであろうか？ ウィトゲンシュタインの見解と異なり、まさに“「 p 」も「 q 」も命題であり、変項ではない”場合においてなのである。ここまで示した”関数”とは少し事情が異なる。

「無門も道元もどちらかも寺にいる」つまり「無門は寺にいる∧道元は寺にいる」という言語表現（命題）がまずあって、その命題が正しいかどうか具体的事実を確かめた上で判断する場合がある。論理式の「正しさ」が保障されるのではなく、命題という言語表現が一定に保たれるのである（つまり変項ではない）。変わりうるのは対応する事実の方である。

あるいは、無門や道元という人が寺にいる（あるいはいない）様子を絵に描いた上で、この絵は「無門も道元もどちらも寺にいる」状況を示しているのかどうか判断してもらい、どう場合もあろう。つまり具体的事態をその命題が正確に表現しているのか判断するのである。

p = 無門は寺にいる、 q = 道元は寺にいる、はそれぞれ命題であり変項ではない。そして実際に無門も道元も寺にいれば $p \wedge q$ は「正しい」し、どちらかがいない、あるいは両方いない場合「間違い」になる。

p	q	$p \wedge q$	正しい命題
真	真	真	$p \wedge q$
真	偽	偽	$p \wedge \neg q$
偽	真	偽	$\neg p \wedge q$
偽	偽	偽	$\neg p \wedge \neg q$

p が真とは、 p という言語表現（命題）とその言語表現が指し示す事実・事態とが一致している、 p が偽とは p という言語表現と事実・事態とが一致していないということである。

ただし上記のような真理（値）表も、どのような事実・事態を扱うかによってその形は異なりうる（特に選言や条件法の場合）。本稿の最初の部分でも紹介したが、以下のレポートで詳細に説明しているので参考にしていきたい。

A→Bが「正しい」とはどういうことなのか ～真理(値)表とは何なのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report40.pdf

選言の真偽とはいったい何なのか：(¬A ∨ B) ≡ (A→B) に根拠はあるのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report38.pdf

真偽判断の前提となる世界、定義域、論理空間が異なれば、同じ論理形式においても真理（値）表のとり値が変化してくる場合もある。真偽判断が不可能になったりナンセンス文になってしまったりする場合もある。

いずれにせよ、 $f(x)=x+1$ も「pかつq」も特定の事実・事態（定義域）を前提とした上ではじめて成立する関数と言えるのである。これは**論理の真偽も定義域（つまり特定の事実認識）が前提となっていることを示している**と言える。繰り返すが**論理はア・プリオリではないのだ**。

3. 経験と現実

野矢氏は「経験」について次のように説明されている。

「ア・プリオリ」という伝統的な哲学用語はウィトゲンシュタインの哲学においてもキーワードとなる。それは「経験に先立つ」ものであり、「経験」とは論理空間における諸可能性の中のどれが現実として現れているかを認識することである。別の言い方をすれば、**経験命題の真偽を確定するものが経験であり、「ア・プリオリ」とは、検証に先立ち、検証を可能にするために前提にされている**ということにほかならない。

（野矢、178 ページ）

ここで「現実」とは何なのだろうか？

たとえば、前章で事例に挙げた・・・無門や道元という人が寺にいる（あるいはいない）様子を絵に描いた上で、この絵は「無門も道元もどちらも寺にいる」状況を示しているのかわか判断してもらう、という場合、つまり具体的事態をその命題が正確に表現しているのかという判断などである。

無門や道元という人が実際に寺にいなかったとして、つまり現実ではなかったとしても、そこに書かれた絵について真偽を判断することはできる。そして事態も実際に絵や図として現れたということに関しては現実・事実なのである。

さらに言えば、「今私が誰のことについて考えたでしょう？」という問いに「〇〇さんのことだ」と答えた時、そこに正解・不正解、つまり真偽が発生する（証拠として答える前に出題者が誰のことを考えたのかメモを取っておけば信憑性が増すであろう）。

このように人が考えただけのこと、心像や言葉についても、それが“現実”であろうとなかろうと、考えたその事実、そして考えた事柄そのものは現実として現れたものなのであり、それらは真偽を確定する“経験”であると言えるのである。

そして、

言語もまた、世界の中で生じるひとつの事実なのである。（野矢、45 ページ）

・・・と野矢氏も述べられている。言葉をしゃべったこと、思い浮かべたこと、書いたこと、読んだこと、すべて事実であり現実であり経験なのである。

「 p かつ q 」あるいは $f(x)=x+1$ と紙に書いたこと、コンピュータで打ち込んだこと、それらすべて“現実”である。そしてその論理や数式に関する具体的事例を思い浮かべたこと、それもすべて“現実”に他ならないし、それらも具体的経験であることには変わらない。論理について考えたこと、論理を組み立てたこと、それらも当然具体的経験であるし現実である。

ウィトゲンシュタインの経験観は非常に恣意的なのだ。要するに真偽判断を伴う認識だけが現実であり経験であると言うわけなのだが・・・それでは（繰り返しになるが）現実化しない事態についての真偽判断は現実なのか経験なのか、心理的状况に関する判断に真偽は求められないのか、想像に関しては真偽を求められないのか・・・様々な疑問が出て来るわけである。

さらに言葉について考えたこと、その言葉が意味する事実・事態について思い浮かべたこと（その思い浮かべたことに関しても真偽が問える）、論理を組み立てたこと、数式について考えたり書き記したりしたこと・・・これらも事実として経験されたことなのではなかろうか。

さらに言えば、この命題は「正しい」と思ったこと「間違い」と思ったこと、それらも現実として現れた経験・事実には他ならない。

では「正しい」「間違い」とは何かということなのだが・・・結局は言語と（その言語が指し示す）事実・事態との繋がり合い・組み合わせが正確になされているのかどうか、究極的にはそこになる。

「言葉」を用いることで、「言葉」により特定の事実・事態を指し示すようになって初めてそこに「正しい」「間違い」というものが生まれてくる。事実・事態はその事実・事態であっ

て「正しい」「間違い」という判断とは無縁である。もちろん言葉のみがそこにあってもそれが「正しい」「間違い」と判断できるものではない。

その言葉、言語表現が具体的経験として現れる事実・事態と合致しているのか、「正しさ」とは究極的にそこに行きつくものなのである。

私はすべての経験が現実であり、想像したこと、考えたこと、言葉をしゃべったり読んだりしたこと・・・すべて事実であり、事態でさえ実際に現れた（想像された、描かれた）のであればそれは事実であり現実である、そう説明した。

その上で、私達は日常的に現実で起こったこと、そして想像はしたが実際には起こっていないこと（そして起こりうる可能性があること、または起こりえないこと）を区別している。厳密に線引きできないこともあるが、とりあえずそれらを区別しながら生活している。

それらを区別する前提として、まずは私や他者がこの世界（宇宙でも良い）に住み、そこでは具体的に起こっている事象・出来事がある。そして私たちは何かを考えたり想像したりしながら生活している。実際に起こっていない事柄について空想したり物語を作ったりすることもできる。

具体的経験から出発した上で、そういった空想・想像、（一般的に言う）現実世界という区別を私たちはできている、そういった世界観が前提（前章で説明した”定義域”であるとも言える）となった上で、

「ア・プリオリ」という伝統的な哲学用語はウィトゲンシュタインの哲学においてもキーワードとなる。それは「経験に先立つ」ものであり、「経験」とは論理空間における諸可能性の中のどれが現実として現れているかを認識することである。（野矢、178 ページ）

・・・というものの見方をすることが可能となるのである。そして（一般的に言う）現実世界における真偽、おとぎ話、あるいは特定のルール設定のもとで導かれる真偽という論理空間が形成されるわけである。

4. 論理空間は一つではない

拙著、

命題を（論理的）トートロジーと決めつけた上で $A \rightarrow B$ の真理値を逆算するのは正当か？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report39.pdf

の第3章「論証の妥当性は論証の形式ではなく内容、そして論理空間にかかわる」（4～6 ページ）で私は次のように説明している。

たとえば「サンタクロースがプレゼントをくれる」という命題において、「サンタクロース」が指示対象をもたないと分かったときのように。そのとき、要素命題「 a は f 」は偽とされるだろうか。それとも、ナンセンスになるのだろうか。

こんどの答えは、「ナンセンス」である。

というのも、「 a は f 」は要素命題であるから、その名がいかなる対象も表わさないということになれば、それは端的に像として成立していないものとなり、像ではないものに対しては、真といえないのはもちろん、もはや偽と言うこともできないのである。（野矢、136～137 ページ）

・・・「サンタクロースがプレゼントをくれる」という命題をナンセンスと判断するかは議論の分かれるところであろう。私たちは「サンタクロースがプレゼントをくれる」という状況を想像することができるし、そういったおとぎ話は世界中にあちこちあると思われる。そのおとぎ話という論理空間においては、「サンタクロースがプレゼントをくれる」という命題は真であると判断できる。しかし現実として考えれば当然、偽となる。

つまり、同じ文章（命題）であっても、その命題の背景となる論理空間が現実であるかおとぎ話の内容であるかによって、その真偽判断が異なってくるのである。

学校の授業では、国語の時間に小説の内容についての問題を解いて正解や不正解になる。野矢氏の説明では、私たちが学校で解いてきたそれらの問題の答えは全部ナンセンスということになってしまう。

もっとも、世界中には公認されたサンタクロースの人たちがいるようなので、そのことを考慮に入れば「サンタクロースがプレゼントをくれる」という命題はナンセンスどころか事実なのであるが・・・

野矢氏はウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を引き合いに出し、次のように説明されている。

3・25 命題の完全な分析がひとつ、そしてただひとつ存在する。

これは論理空間がひとつであることを言い換えたものにほかならない。(野矢、139ページ：『論理哲学論考』からの引用含む)

しかし、ここまで説明してきたように、上記のような主張は正当化されない。実際には様々な論理空間が形成可能なのである。

ここまで見てきたように、**命題の真偽は、事実であれ事態であれ、現実であれ想像上のお話であれ、その命題が指し示す何らかの対象を見出せるかどうか、つまりその命題の意味・内容にかかわっている**のである。

それがつくり話でも良い。それが何らかの架空の対象でありうるのであれば、その対象を指し示す命題は(そのつくり話の論理空間においては)真となるのである。もちろん現実では偽となるのだが。そしてそれをナンセンスと呼ぶのかどうかは先に述べたように議論の分かれるところである。

三段論法はその論理形式ゆえに正しいのではない。その内容、そして背景となる論理空間に応じて正しくなったり間違いになったりするのである。つまり論理形式のみから”恒真”であるという結論を導き出すことはできないし、それが論理的トートロジーであるという根拠にもならないのである。(拙著の引用ここまで)

5. 規則・ルールを決めることで論理空間が形成される (1)

例えば野球競技には野球競技のルールがある。そしてそれは一つの論理空間を形成し、特定の真偽関係が現れて来る。例えば、

- ① ファール安打 (ファール ∧ 安打) → 矛盾? 偽?
- ② 内野安打 (内野 ∧ 安打) → 矛盾ではない (恒真ではないが)
- ③ (ボール4の前に) ストライクを3つ取られるとバッターアウト → 真
- ④ ボール4で三振バッターアウト → 偽

・・・このような真偽関係を導き出すこともできる。これらは野球のルールが不変である限り変化することはない。ルール設定により自動的に導かれる、恣意的な変更の許されない真偽関係なのである。①を矛盾とするか偽とするか判断の分かれるところである。野球競技におけるルールから導き出される論理空間ではありえない話であるが、そういうものを想像することはできるからである。しかし「丸い四角」は矛盾である一方、「丸い」「四角」はそれぞれ描いたり想像したりすることができるものである。(ファール ∧ 安打) は (丸い ∧ 四

角) と似たようなものであると考えることもできる。

野球のルールが変更されて4ストライクでアウトということになれば③は偽になる。内野ゴロはすべてアウトというルールになれば、②は偽となる。同じ命題がルール変更により真偽が変化する(あるいは矛盾になる)可能性もある。つまり

「経験」とは論理空間における諸可能性の中のどれが現実として現れているかを認識することである。別の言い方をすれば、経験命題の真偽を確定するものが経験(野矢、178ページ)

・・・と一律に説明できるような単純なものではない。そして、例えば「pかつq」などの論理語を含む命題に関しても、その真偽は背景となる論理空間を“定義域”とした上で導かれているのである。

特定の命題が、「現実世界」という論理空間では偽(あるいはナンセンス)となり「小説」という論理空間では真になったりする。「(3回バットを振る ∧ 投球されたボールにバットが当たらない) → アウト」というような命題は「野球」という論理空間では真になるが「ラグビー」という論理空間ではナンセンスとなってしまう。

6. 規則・ルールを決めることで論理空間が形成される (2)

ダメットが「真理(1959)」「真理という謎」(藤田晋吾訳、勁草書房、1986年、1~43ページ)で示した事例について考えてみよう。

前件が命令を受けた人の能力内にあるような条件付き命令(たとえば、母親が子供に「外出するのなら、コートを着て行きなさい」と言う)は、つねに真理関数的条件法での賭のようなものである。(ダメット、15ページ)

・・・こういった事例はしばしば論理学における条件法(AならばB)の真理値の根拠として挙げられる。しかしこれは明らかな見間違いなのである。

A	B	命令の順守
外出した	コートを着た	守っている
外出した	コートを着なかった	守っていない
外出しなかった	コートを着た	守っている
外出しなかった	コートを着なかった	守っている

上記（真理関数的条件法に従った命令内容）のような考え方もあるが、下記のように考えることもできるのである。外出しなかったから賭けが成立しなかった、という見方も可能ということである。結局のところどちらでも良いのだ。なぜなら人為的ルールだからだ。

A	B	命令の順守
外出した	コートを着た	守っている
外出した	コートを着なかった	守っていない
外出しなかった	コートを着た	無効
外出しなかった	コートを着なかった	無効

・・・これ（後者）はダメットの言う「条件付き賭」となる。しかし**真理関数的条件法に従った命令内容にするのか、条件付き賭に従った命令内容にするのかは、命令する人がどう考えるかにかかっている**のであって、別にどちらが正しいとか間違いとか判断できるようなものではない。そもそも**真偽の問題ではない**のだから。

これは真偽関係そのものではなく、その前提となるルールなのである。真偽関係は次のように定まるであろう。下記の表で示すように、ルールが変更されれば同じ命題でもその真偽が変わってくる。

$(A \wedge B)$	C	$(A \wedge B) \rightarrow C$
(雨が降る \wedge コートを着る)	命令を守っている	真
(雨が降る \wedge コートを着る)	命令を守っていない	偽
(雨が降らない \wedge コートを着る)	命令を守っている	真・あるいは無効
(雨が降らない \wedge コートを着ない)	命令を守っている	真・あるいは無効

7. ナンセンスな話は論理空間となりえるのか

小説で「AさんがBさんを殺した」という話は、小説上では「正しい」が事実としては「間違い」である。AさんBさんが実在しない人ならば「ナンセンス」といわれるかもしれない（野矢氏の考え方では）。ただ実際に空想したりできるわけであるから有意味性は担保されているようには思える。

「一人の人間が現在にいながら過去の自分と話ができる世界」についての物語を書いたとする。現実ではありえない設定が物語の思いがけない展開をもたらすことがあるかもしれない。SF小説などは現実離れした設定と現実世界の法則や因果関係とが入り混じった上

で構築される物語である。現実離れした設定が物語をおもしろくする。今の私が過去の私と話をすることを想像することはできるだろうし、私でなくても他のだれかについても同じように想像くらいはできよう。そういう意味では有意味性は担保されているように思える。

ただ、今の私が過去の私と話をするというプロセスをより科学的に厳密に検証していけば、その過程に想像不可能な（つまり対応する事実・事態を有さない）ナンセンスな論理・理論が含まれているかもしれない。このあたり、ゆるく考えるか厳密に考えるかで判断が違ってくる可能性がある。

一方、「平面に描かれた直線が交わる」状況を私たちは具体的事象として空想することも描くこともできない。そういった矛盾から空想小説の物語を広げることできるかもしれない。しかし、その物語から抽出された論理を物語の外へ拡張したところで、それは空想以上のものにはならず、その真偽を決定することは不可能である。ただ物語そのものを空想しながら楽しむことはできようから、その物語自体をナンセンスと断じるのも難しそうである。

そして似たようなケースは数学でも見られる。「ある直線に対し、その直線の上にはない点を通る平行線は2本以上ある」（瀬山士郎『数学にとって証明とはなにか』（講談社、28ページ）を「公理」としても矛盾のない幾何学（非ユークリッド幾何学）が構成できる（瀬山、28ページ）そうである。

この非ユークリッド幾何学の発見は、数学における公理の意味を根本から変えてしまいました。公理はすべての人が共通に納得する「事実」ではなくなってしまったのです。（瀬山、28ページ）

・・・「ある直線に対し、その直線の上にはない点を通る平行線は2本以上ある」という言語表現そのものが「矛盾」である。つまりそこからいくら論理を積み重ねても「矛盾のない幾何学」どころか矛盾であることに変わりはないのである。私たちの現実世界に根拠を持たないものを「公理」としたとき、果たして私たちの現実世界（への一般的常識的認識）を根拠とした論理を適用してその矛盾について語ることは果たして正当化されるのであろうか？ 矛盾を前提とする世界において、現実世界によって根拠づけられている論理体系自体が正当化される根拠はあるのだろうか？

結局のところ、矛盾を出発点とする非ユークリッド幾何学は、“その論理だけでは”真偽を確かめる根拠、最終手段を持ち合わせていないものなのである。論理を論理だけで根拠づけることはできない。論理そのものが根拠を失っているからだ。

しかし、その公理系が事実として現れている現象を上手く説明できたとすれば・・・つまり事実との合致が認められれば、「ある直線に対し、その直線の上にはない点を通る平行線は2本以上ある」という説明が、ひょっとして私たちが思いもしなかった状況を説明しているのではないか、という仮説を立てることも可能ではある。

究極的には「ある直線に対し、その直線の上にはない点を通る平行線は2本以上ある」という言語表現に対応する何らかの具体的現象を確定できなければ、根本的に“証明”されたことにはならない。究極的な“証明”とは言語表現の指し示すものを具体的事実として示すことができる、ということに他ならないのである。繰り返すが究極的な証明は論理で論理を説明することではない（数学で行うような証明問題は究極的証明ではないということ）。

いずれにせよ、私達が抱く論理空間は固定されていると断定できるものではない。矛盾と思われていたものが具体的事実として現れる可能性がある。言語表現の有意味さを担保する論理空間の境界も厳密に明確なわけではない。

「Aさん（同一人物）が東京と京都にいる」という命題は現時点においてはナンセンスであるが、将来技術が進んで意識を2つの地点に持って来れるようになったとしたら・・・（定義の話もあるが）矛盾であると言い切れなくなるかもしれない。

ここまでの説明から、論理空間の境界というものを厳密に引くことは難しそうである。ナンセンス、無意味をどう捉えるか。現代においてナンセンスであることが将来現実として認められる可能性があるのか・・・ただ言えることは、唯一の論理空間というものがあるわけではないこと、論理空間は作り出すことができること、論理空間は（新たな経験により）広がっていく可能性があること、であろうか。

8. 現実世界においても異なる論理空間を抽出できる

現実世界においても異なる論理空間を抽出することができる。以下、拙著

「アイデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである ～竹田青嗣著『プラトン入門』
検証

http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf

の7～8ページからの引用である。

$1 + 1$ は2、はいつも必ずそうなる定められた「純粹ルールの世界」である。ここでは「1」とか「+」という概念は、厳密な論理的秩序をもっている。ところが経験世界では、概念はそのつど何らかの観点を示すだけであって、純粹論理の世界においてのような厳密な秩序をもたない。だから、1と1を足して3になったり、1でしかなかったりということがいくらでもありうる（例＝二つのコップの水を足す、量としては二倍だが、まとまりとしては一になる。違う物質が化合して量が五倍になることもある。つ

まり、観点のとりかたでどうともいえるのだ)。

純粋な論理的推論の世界は、経験の世界とは「原理的に」必然的な関係をもってはいない。前者はもともとは後者から生まれ出たのだが、両者はただ似ているだけなのである。だから本質的に経験世界を越えた問い、つまり、世界の起源は何か、神は存在するか、死んだらどうなるか、等においては、原理的に純粋な推論は成立しない。だからそれらはそもそも「答えの出ない」問いなのである。(竹田青嗣著『プラトン入門』(ちくま新書、48 ページ)

・・・まず「経験世界」という言葉の問題について指摘しておく。**経験は世界ではない**。竹田氏の言われる「経験世界」とは厳密には「経験」から構築された「世界認識」のことである。以下、竹田氏に従って「経験世界」という言葉をそのまま用いる箇所があるが、このことを念頭に置いた上で読み進めていただきたいと思う。

本題に入るが・・・竹田氏は経験世界では「どうともいえる」と説明されているが、これはとんでもない誤解である。二つのコップの水を足すとまとまりとしては一となる。同じことをすればやはり一つになる、何度やってもやはり同じように一つになるのである。この状況を前提とした場合、二つのコップの水を足すと(コップに十分な容量があることも条件であるが)常に一つになる、つまり $1 + 1 = 1$ という「純粋論理」が取り出せるのである。

基石を一つ用意して、もう一つの基石を持って来れば二つになる。基石と基石とがくっついて一つになることはない。この条件下においては $1 + 1 = 2$ が常に成立する。しかし引き付け合いくっついて同化してしまうような物体であれば二つにならない。このような場合 $1 + 1 = 2$ が成立しない。 $1 + 1 = 2$ という「純粋論理」も、こういった「条件」を前提とした上で成立するものなのである。

つまり、様々な条件において様々な論理が取り出せるが、それは「どうともいえる」ことでは決してない、一定の条件下においては特定の論理が確かに成立しているのだ。そしてその論理は私たちの経験の積み重ねによって根拠づけられているのである。

量子力学の世界では、従来の論理というものが通用しない場面があるらしい。つまり量子力学においては量子力学における論理世界というものが形成されうるのである。それも一種の「純粋論理」なのである。

私たちは学校で算数・数学を勉強することで、 $1 + 1 = 2$ の世界のみが「純粋論理」であると教え込まれている。学校教育の成果をア・プリオリと勘違いしているだけなのだ。つまり、純粋論理とは「経験世界と似ている」ものなのではなく、「経験世界の一部」なのである。竹田氏も「前者はもともとは後者から生まれ出たのだが」と述べられている。そこから「生まれ出た」のになぜ「原理的に異質な世界」だと断言できるのか？ その根拠さえも明確ではない。(以上、引用終わり)

9. 論理空間は経験として現れうるもの

野矢氏は以下のように述べられているが・・・

「ア・プリオリ」とは、検証に先立ち、検証を可能にするために前提にされているということにほかならない。(野矢、178 ページ)

世界が現実になどなっているかを知る前に、その探求が可能であるためにも、われわれは論理を把握していなければならない。そしてこの論理のア・プリオリ性は、まさに論理語が操作であることによるのである。(野矢、179 ページ)

この説明に反して、論理それ自体が現実を把握しているからこそ導かれ確かめられること、そして操作それ自体が経験として現れるもの、事実であり事態であることは既に述べてきた。

たとえば「ポチは白い」が真なのか偽なのかを知る前にわれわれはまずその意味するところを理解していなければならない。(野矢、182 ページ)

・・・もちろん、私たちはあらかじめ「犬」という言葉とその対象物との対応関係を知っていなければ（あるいは事前にそうであると自分自身で定義していなければ）、今そこにいる生物が「犬」かどうか判断することができない。

だが、この問題については、以前誰かに「白色」あるいは「犬」について教えてもらった、学校で教えてもらった、テレビや本で見た・・・といった”過去の出来事”との因果関係として説明するものであって、”論理形式”によって説明されるものではないことは、以下の拙著で詳細に説明している。

「語りえない」ものとは？ ～ 野矢茂樹著、ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む、第1～3章の分析

http://miya.aki.gs/miya/miya_report35.pdf

特に15～26ページで詳細に説明しているので参考にしていただければ幸いです。同一性、外的・内的性質、論理形式などについて論じている。

「白」という色をどこで習ったかなど、具体的記憶はもはや消え失せて思い出しようもないかもしれないが・・・どこかで何らかの形で知ったのだろう、と因果的に推測するしかないであろう。

分析哲学では、このような具体的出来事どうしの因果的関連づけの問題を、

論理空間：「その対象のもつ論理形式のすべて」（野矢、53 ページ）を捉えている
→認識の成立、真偽の成立

というふうに”モデル的”に捉えてしまっているのだ。これらは皆”後付け”の説明であって、私たちが「白」や「犬」を見つけるとき、そのような論理形式が作用しているのかどうかなど分かりようもないのである。

そして論理空間についてであるが、

論理空間もまた、ある意味でア・プリオリであるように思われる。論理空間は可能性の総体であるから、現実がどうであるかを認識する以前に、その認識を成立させる前提としてあらねばならない。（野矢、182 ページ）

・・・という野矢氏の説明に反して、小説などのフィクションの物語やスポーツのルールによって形成される論理空間とは、人為的に作り上げられたものである（現実世界から抽出された論理と組み合わせられたりもするが）。

そして現実世界における論理空間においても、その”可能性”とは具体的に事実・事態として現れうる、私達の具体的経験として現れうるということに他ならない。言語表現に対応する事実・事態が見つけれない場合、その言語表現の有意性は保証されていないのである。その言語表現（「仮説」と表現される場合もある）が将来的に具体的事象（事実）として見出される可能性はもちろんある（つまり論理空間の拡張）。しかし、それもあくまで私たちの観測、具体的経験によるものであることには変わらない。

いずれにせよ論理空間は経験として現れるものなのである。

そして論理空間は”認識を成立させる前提”なのだろうか？

例えばあるものを見つけてそれに名前を付けたとする。それは具体的な物体や生き物だけでなく、自らの気持ちに対してでも良い。するとその新たな言葉と具体的事象（経験）との組み合わせが論理空間の一つの要素として加わっていくのである。

むしろそうした具体的な現実経験は論理空間を導く前提であるとも言えるのだ。そして言語表現の真偽を判断する際の”前提”となるのだと言える。

いかなる対象が存在するか、そしていかなる要素命題が存在するか、それは命題の真偽に先立って確定していなければならないものであり、その意味では「ア・プリオリ」と言わねばならない。（野矢、183 ページ）

・・・という野矢氏の説明は、結局のところア・プリオリの問題ではなく、”過去の経験”の

問題なのである。それゆえか、論理空間がア・プリオリであるという主張は野矢氏自身によって弱められてしまう。

何か対象を切り出すのに十分な経験を経ていなければ、論理空間を構成することもできない。(野矢、184 ページ)

それゆえ私は、論理を「ア・プリオリ」とするのとまったく同じ意味で論理空間をも「ア・プリオリ」とすることに躊躇する。むしろ、ウィトゲンシュタインが嫌いそうな不細工な用語法ではあるが、論理を「強いア・プリオリ」として、そして論理空間を「弱いア・プリオリ」として、その強弱を区別したくなる。(野矢、184 ページ)

これは実質論理空間のア・プリオリ性を否定したものであるのではなからうか。

今現在、想像、空想あるいは回想できているのだから、それを可能にするなにかの経験が過去にあったのだろう、と過去における経験との因果的関連付けを試みているわけである。

つまり、野矢氏の言われる「**存在論的経験**」(野矢、184 ページ)は過去の経験の回想、あるいはそうであつただろうという過去の出来事の因果的推論のことであり、「**認識論的経験**」(野矢、184 ページ)は命題の正誤判断をしている時点における経験のことであるとも言える。ア・プリオリ云々とは全く別次元の話なのである。

実際、

はじめて犬に出会い、「犬」という概念をそこから学び取る場面、あるいははじめてポチに出会い、「ポチ」という名を学び取る場面、それゆえ、多かれ少なかれ私が「ああ、こういうものがあつたのか」と目を開かされる場面、それが**存在論的経験**である。それに対して、「ポチ」という名をすでに知っており、また「傷」という概念も知っている段階で、「あれ、ポチに傷がある」と発見する場面、それが**認識論的経験**にほかならない。(野矢、184～185 ページ)

・・・と説明されている。「犬」を知るのには別にテレビでも良いし図鑑でも良い。いろいろなケースがありえよう。いずれにせよそれらは「過去の経験」であるにすぎない。話は非常に単純なのである。

ただ、そこで必要なのはあくまで犬という「言葉」とその対象物(あるいは事象)との組み合わせであつて、学び取るのは「概念」ではない。そんなものはどこにもない。

物を見ただけでその名前を教えられなければ、「それは犬だ」という判断もできはしないし、反対に「犬」という言葉だけを教えてもらってもその対象物が何か分からなければやはり「それは犬だ」という判断はできないのである。

10. 存在は経験から導かれる、すべての始まりは経験

野矢氏は灯り a、b を引き合いに出し「点灯論理空間」(野矢、185 ページ)として説明されている(つまり任意に論理空間を設定できるということではないのか?)。

対象は二つの灯り a と b、およびその状態として点灯しているという状態。いかなる事態も含まないことを ϕ で表わすこととして、論理空間は次のように四つの状況 w1、w2、w3、w4 の総体となる。

w1..... ϕ

w2.....a - 点灯している

w3.....b - 点灯している

w4.....a - 点灯している、b - 点灯している(野矢、185 ページ)

そして、w1 について、

w1 は現実化するだろうか。それはあらゆる事態が成立していない、事実ゼロの世界である。完璧に虚無の世界というしかない。そんな空無世界が現実化するだろうか。不可能である。(野矢、186 ページ)

・・・としているが、私たちは灯り a、b どちらも点灯していない事態を想像することができるし、二つの灯りを作って灯り a、灯り b と名付け、どちらも点灯しないでおく状態にしておくこともできる。それが「不可能世界」(野矢、186 ページ)であるとはどういうことなのだろうか? そもそも w1 を ϕ 、「いかなる事態も含まない」(野矢、185 ページ)とするのには無理がある。繰り返すが灯りがどちらも点灯していない事態を想像することは簡単にできることだからである。実際、私達は灯りが点灯していない状況をしばしば見ているし(具体的に経験している)、それらを想像したり描いたり、写真や絵で示したりすることもできる。灯りが消えたからといって灯りそのものが消滅するわけでもないし、世界がなくなるわけでもない。

もちろん論理空間=実現可能性では論理空間を説明することなどできない。それゆえに野矢氏はこれまでの説明を改め、

論理空間は有意味な命題の総体を規定する。すなわち、論理空間が張る可能性は「理解可能性」なのである。それは必ずしも「実現可能性」という意味での可能性ではない。(野矢、186 ページ)

と主張されているのである。しかし・・・ならばそもそも「理解」とはいったい何なのか？という問題になってしまう。結局のところ命題（言語表現）が有意味かどうか、その命題が何らかの具体的事実・事態を指し示すことができるかどうかなのである。それが空虚であれば無意味となる。

つまり何らかの具体的事実・事態を指し示すことができる命題群、それが論理空間なのである。そして既に述べたように、ある論理空間では真であるのに別の論理空間では偽、あるいはナンセンスになる、という状況も実際にある。

論理はいかなる対象が存在するかに依存しない。しかし、もしいっさい対象が存在しないのであれば、そこでは論理空間を張ることさえできなくなってしまう。そして、論理空間が存在しないところでただ論理語の操作だけを掲げても、空しい。論理空間が存在しなければ論理はその仕事場を失う。ともあれ、なんらかの論理空間が、それゆえなんらかの存在が、存在しなければならない。（野矢、188 ページ）

・・・これが”悩ましい”（野矢、188 ページ）と思うのは論理が対象から離れて独立に成立していると考えているからに他ならない。対象がなければ論理はない。論理は対象の在り方に依存しているのである。

そして、論理空間という前提がなければ命題の真偽を定めることもできない。”論理語の操作だけを掲げても、空しい”とはまさにそういうことであろうと思う。

そしてここで「存在」という言葉が出て来る。

5・552 論理を理解するために我々が必要とする「経験」は何かがかくかくであるというものではなく、何かがあるというものである。しかしそれはまさにいささかも経験ではない。

論理は何かがこのようにあるといういかなる経験よりも前にある。

論理は「いかに」よりも前にあるが、「何が」よりも前ではない。

「ともあれ何かが存在する」ということ、これは存在論的经验よりも原初的であり、たしかにもはや経験とは呼びえないだろう。しかし、私の前になんらかの可能性が開けているかぎり、私はどこかで現実と接触していなければならない。何かが存在することを、私は確かなものとして受けとめていなければならない。ともあれ何かが存在する。それは認識よりも、論理よりも、あらゆるものに先立つ、始原なのである。（野矢、188～189 ページ）

・・・この考え方が事実に対しひっくりかえったものであることは何度も説明してきた。論

理は経験から導かれるものであって決して論理の前にあるものではない。

本稿第3章で説明したが、すべては経験として現れて来る。言葉は具体的経験として現れる事実である。目の前にあるものを見て「犬だ」と思ったり喋ったりしたことも具体的経験（そして事実）である。事態でさえ私たちの心像として、あるいは描かれた図や絵などで事実として現れて来る。論理を構築したことも具体的経験として現れた事実である。「正しい」と思ったことも「間違い」と思ったことも具体的事実として、そして私たちの経験として現れて来るのである。

「何かが存在する」ということは、結局のところ「そこに何か見える」「それを触ることができる」といった私たちの知覚経験と同義なのであって、原初的なものではない。そこに犬がいると思うことが、「事物の存在」という抽象的・全般的な認識（というか言語表現）の根拠なのである。「何かがある」とする場合においてでさえ、言葉は現れないがそこに何かが見えている、あるいは見えていなくても触れることができている、そういった知覚経験が究極的根拠（つまり「何かが存在することを」「確かなものとして受けとめ」る根拠）となっているのである。

すべての始まりは経験であり、経験なくして何も始まらないのである。

<付録> 論理の「正しさ」は論理空間に支えられている： 第9章「命題の構成可能性と無限」に対する若干のコメント

以下、第9章「命題の構成可能性と無限」（野矢、199～204ページ）に対するコメントである。

（1）論理空間のア・プリオリ性は野矢氏自身により完全に否定されている

私が今までに何人の人物と出会ったかによって私の論理空間は大きくも小さくもなる。
（野矢、196ページ）

（2）論理の「正しさ」は論理空間に支えられている

本稿により、以下のような見解は既に否定されているのだが、再度別の事例から検証してみようと思う。

トートロジーはもはや論理空間のあり方をまったく示唆することがない。それゆえ、ト

ートロジーがトートロジーであるのはいかなる論理空間が設定されるかにさえ先立つ、強い意味でア・プリオリなことなのである。(野矢、199 ページ)

論理的トートロジーが幻想であることは以下のレポートで明らかにしている。

A→Bが「正しい」とはどういうことなのか ～真理(値)表とは何なのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report40.pdf

また、論理的トートロジーと論理空間との関係については、以下のレポート

命題を(論理的)トートロジーと決めつけた上でA→Bの真理値を逆算するのは正当か?

http://miya.aki.gs/miya/miya_report39.pdf

の第3章「論証の妥当性は論証の形式ではなく内容、そして論理空間にかかわる」で説明している。以下のような論証について、

平賀源内は『スターウォーズ：エピソード1』の出演者である

『スターウォーズ：エピソード1』の出演者はみんなジョージ・ルーカスのことを知っている

平賀源内はジョージ・ルーカスのことを知っている

(戸田山和久著『論理学をつくる』(名古屋大学出版会、9 ページ)

戸田山氏はこの論証を「偽の命題を含んだ正しい論証」(戸田山『論理学をつくる』10 ページ)としている。しかし偽の命題を含んでいる時点で、この論証は既に破綻しているのである。間違いを含んでいる点で、論証が「正しい」と言えるはずがない。

しかし、平賀源内が現代にタイムスリップしてスターウォーズに出演するというような物語を想像したり描いたりすることはできる。そういった物語上においては上記の論証は「正しい」と言えるようになる。この論点も本稿で説明してきたとおりである。

つまり戸田山氏は「論理空間の混同」に陥っているのである。論理空間と論証の「正しさ」の関係から言えば、

- ① 現実という論理空間⇒上記の論証は偽
- ② (平賀源内がタイムスリップしてスターウォーズに出演するという)物語、あるいは空想された情景という論理空間⇒上記の論証は真

となる。②について、私達はその情景を想像できる(そういった物語を映画にすることもできよう)ということから、命題(そして論証)は有意味性を担保できているように思える。

しかし、タイムスリップという現象を厳密に論証しようとするれば、そこにナンセンスな論理・理論が入り込んでいるであろう。ナンセンスと有意味性との境界を厳密に定義することは難しそうである。ゆるく考えれば有意味だが厳密に考えればナンセンスの部分が入り込んでいるからだ（単に定義してしまえば良いだけかもしれないが）。

いずれにせよ、 $A \rightarrow B$ 、 $B \rightarrow C$ ならば $A \rightarrow C$ という論証の「正しさ」はその”形式”により担保されるのではなく、あくまで A 、 B 、 C という命題の「正しさ」（あるいは $A \rightarrow B$ 、 $B \rightarrow C$ という命題の「正しさ」と、その論証の前提となる”論理空間”により定まって来るということなのである。

さらにもう一つ論点がある。野矢茂樹著『入門！論理学』（中公新書）では次のように述べられている。

私たちがこの本でめざそうとしている論理体系は、さっきも言いましたように、排中律を論理法則として認めるものです。それはつまり、まずはあいまいでない明確な概念だけを扱うことに決める、ということにほかなりません。（野矢『入門！論理学』49ページ）

つまり二値原理が成立する事柄のみがあるという「論理空間」を前提としたトートロジーであると言えるのだ。「好きでも嫌いでもない」とかいうどちらとも言えないようなあいまいな状況は排中律を支える論理空間から除外されているのである。

野矢氏は「太郎は勇気がある」という主張に関しても排中律があやしく思われるとしている（野矢『入門！論理学』50～52ページ）。起こりうるかもしれなかったが起こらなかった事象があるかもしれない、勇気があるとかないとか決めつけるには「証拠不十分」（野矢『入門！論理学』52ページ）ではないか、ということなのだ。私が思うに、これも結局は”あいまいさ”の一種と言えるのではなからうか。

引用文献（拙著以外）

野矢茂樹著『ウイットゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』（筑摩書房、2006年）

M.ダメット著「真理（1959）」『真理という謎』（藤田晋吾訳、勁草書房、1986年、1～43ページ）

瀬山士郎著『数学にとって証明とはなにか』（講談社、2019年）

竹田青嗣著『プラトン入門』（ちくま新書、48ページ、1999年）

戸田山和久著『論理学をつくる』（名古屋大学出版会、2000年）

野矢茂樹著『入門！論理学』（中公新書、2006年）